



# 異世界召喚されました ……断る! 2

α L P H α L I G H T

**K1-M**



## 登場人物紹介

## マサシ・ヨバヤシ

冒険者ギルドのマスター。  
転移前は日本人で、  
トーチの友人の弟だった。  
トーチには  
頭が上がらない。

## カーク

14歳の少年冒険者。  
同年代が集まった  
パーティーの  
リーダーを務める。  
剣士を志す。

## ソウシ・ベルウッド

ベルウッド商会のトップ。  
転移前は日本人で、  
トーチの先輩だった。  
見かけは若いがい、  
九十歳を超えている。

## ドウバル

ドワーフ族の鍛冶職人。  
職人気質で、  
物作りへの  
こだわりが強い。  
お酒が大好き。

## トーチ (村瀬 刀一)

本編の主人公。  
日本から召喚された際に、  
18歳へ若返った元おっさん。  
様々なチートスキルを持つ。

## 子狼

希少種である  
スノウホワイトウルフ。  
「神狼の使い」とも  
言われる。  
とにかく可愛い。

皇都を出てから数日、俺——村瀬刀一は、ベルセに帰還し、一緒だった冒険者、商人達と別れる。

「今度一緒に依頼受けようなあ」

「今度は護衛依頼出します」

俺はソロだから、とずっと断っていたのだが、別れ際にまた言われたので、苦笑いで返しておく。

街に到着したのが夕方だったので、まず宿へ行きチエックインを済ませた。

一汗流してから宿を出て、夕食を済ませ、歓楽街を練り歩く。

心の中で『私は帰ってきたあーっ！』とネタを叫んだ。あの作品は至高だな。

翌日、予想通り賢者モード発動。ひたすらゴロゴロする。

夕食時に食堂で、俺を慕う少年冒険者のカーク達と話をし、部屋に戻る。

……そういえばカークに、ダンジョンに行くとは言ったが、皇都に行くとは伝えてなかった。

余計なことを話して心配させるところだった、危なかった。  
ここで賢者モード解除。

「……すう……ふう……」

俺は宿の屋根の上に『転移』して、座り込んでタバコを一服。

明日はどうするか……集めた魔物の素材があるから、売るためにベルウッド商会に顔を出すか。

他は……特にないか。なら、図書館でも行くかな？

「……ふう。さてと……寝るか」

携帯灰皿で火を消し立ち上がる。パンパンツと尻をはたき、『転移』で部屋へ戻る。  
ベッドに寝転がり、ぼーっとしてうちに、俺は意識を手放した。

翌朝、食堂で朝食を取る。カーク達はもう冒険に出たようだ。

朝食を済ませ一服した後、ベルウッド商会へ向かった。

商會に着いて、買取カウンターで素材を売る。

査定後、金を受け取り、店員に商会長のリサさんがいるか尋ねた。

奥へ確認に向かった店員を待っていると、現れた人数は予想より多かった。

何で母親のクラウさんも一緒にいるんですかねえ。

「トーチさん、おはようございます。久しぶりですね」

「リサさん、おはよう。ご無沙汰してます」

「初めまして、クラウド。よろしく、トーチ君」

「トーチです、初めまして」  
……クラウさんは、俺と会ったことを内緒にしてくれているようだ。約束を守ってくれたか。

俺が『転移』を使えることが公になるのは避けたいからな。ちよっとお高めのウイスキーを渡しておいて良かった。

「トーチさん、お茶をご用意しています。応接室へどうぞ」

三人で応接室へ向かう。応接室のソファに座り、お茶を一口。

「ふう」

なかなかうまい。

お茶請け、なんか良いのあったかな？ と腰の袋（実は『アイテムボックスEX』）に手を突っ込む。

皇都で買ったスポンジケーキはあったが、『転移』の件がばれるから、コレは出せないな。

他に何かないかと探すが、焼き串とかしかなかった。

「お茶請け、どうぞ」

リサさんに出されてしまった。

「すみません、リサさん。ただだいてばかりで……リサさん？」

「……敬語」

「……は？」

「……敬語はなしでって、言いましたよね？」

「え、あ、はい。……んんつ、敬語はなしだな、分かった」

「はい」

「……ふふ」

リサさんと話していると、急にクラウさんが笑った。

「お母さん？」

首を傾げて尋ねるリサさん。

「いや、すまん。トーチ君、私にも敬語は不要だ」

「はあ……。ああ、分かった」

それから、俺と同じく日本からの転移者らしいリサさんの祖父について、話を聞いた。

「祖父が旅から戻るのに、後一週間くらい、といったところでしようね」

「分かった。着いたら連絡くれるんだろ？ 待つことにするよ」

「すみません、よろしくお願ひします」

そう言って帰ろうとすると、クラウさんに引き留められた。

「君、ウチの店でバーベキューコンロを買ったらいいじゃないか」

「買ったけど、それが？」

「昼時も近いしどうだろう、店の裏庭で一焼きしていかないか？」

「ちよつとお母さんっ？」

笑顔のクラウさんに対し、目を丸くするリサさん。

クラウさんは以前、俺の提供したビッグボアの肉を食べているから、肉目当てか？

だが……。

「分かった……焼きましようっ！」

こうして、突如としてバーベキューが始まった。

俺はコンロなどの機材と肉を用意し、残りの食材は商会で用意してくれた。

店員さんが代わる代わる食いに来るので、バーベキューは昼から夕方まで続いた。

一番活躍したのは、日本産の某焼肉のタレ。皆から大人気だった。ありがとう。

後でリサさんに一瓶、クラウさんに三瓶売った。……だって売ってくれて言うから。その時の目が怖かった。

バーベキューが終わり、商会を出て宿に戻る。

受付で今日の夕食について聞かれたが、「今日はもう休みます」と答え、部屋へ。部屋から人のいないところへ『転移』し、缶コーヒーを飲みながら一服。

缶コーヒー一本で銀貨一枚(約千円)、タバコ一本で銅貨三枚(約三百円)って高いよな〜なんて、どうでもいい事を考えたりする。

「んんんん……一週間か。明日からどうすつかなあ〜」

俺はタバコを消し、体を伸ばした。何も思いつかないな。

仕方なく部屋に戻った俺は、時間は早いがお腹もいっぱいだし……とジャージに着替えた。

……あ、今日は図書館行けなかったな。

早めに休んだせいか、翌朝に目覚めるのも早かった。

食堂は開いてるかな? と一階に降りて行くと、カークとその仲間達——ルーク、ニーナ、テレスに会った。

「「「おはようございますー」」」

皆、今日も元気だなあ。

「おはよう」

「お兄さん、ダンジョンの話、詳しく聞きたいです」

「ニーナ、先走り過ぎよ」

テレスが言うと、カークも頷いた。

「そうだよ。まずは食堂に行って朝食にしよう」

「はは。じゃ飯食いながらにしようか」

どうやら食堂は開いてるみたいだ。五人で一旦席に着き、バイキングで皿に盛ってくる。

さて、食べようか。

俺は食事の間、隠し部屋とダンジョンマスターの事を除いて、ダンジョンについて話した。

「オーガロード、レベル15ですか……」

カークの言葉に、ニーナとテレスが顔を見合わせる。

「……うーん、まだ早いよね」

「……私達にはまだ無理ですね」

「そうか? やれそうな気がするけど……」

俺の率直な意見に対して、カークが首を左右に振った。

「いえ、装備も経験も足りてないです」

「よし、今日も依頼がんばろーっ!」

「おーっ！」

ニーナの掛け声に、残りのメンバーが元気よく反応する。うんうん、若いって良いなあ〜元気だなあ〜と、俺は目を細めてカーク達を見ていた。すると、カークから思わぬ一言が。

「あつ、お兄さん。一緒に依頼受けませんか？」



「ふっ！」

『スパアアアッ!!』と音が鳴りそうな感じで刀を振り切り、俺はゴブリンを上下に分断した。

「トーチさん、こっち終わりました」

「ああ、こっちも終わった」

俺は今、カーク達と討伐依頼を受けている。まあ、たまには良いだろう。

今倒したのはゴブリンだが、依頼はスモールボアの討伐だ。

ベルセから少し離れた、小さな村の畑が荒らされているとの事で、畑の警戒中である。

「お兄さんの感知範囲が広いから、今日は楽ねえ」

「そうですね。さすがお兄さんです」

「お目当てのボアは出てきてないけどね」

「そういう事、言わないの」

以上、ニーナとテレスのやり取りである。

「やっぱりお兄さん、ウチのパーティーに入ってよお」

「無理言うな、ニーナ。最初から期間限定って言われてるだろ」

カークがニーナを窘めた。

「私もお兄さんに入ってほしいです」

「テレスまで……」

「悪いな。ベルセで人と会う約束があつて、それから次に行くトコ決めてるんだ」

そう、一緒に依頼を受けるのは、期間限定の約束なのだ。

そうこうしている間に、スモールボアの討伐は終わった。

「——いやあ、正直、スモールボアが三匹出てきた時はどうしようかと思いましたが」

「お兄さんが二匹倒してくれたから助かりました」

「だねえ」

カーク、テレス、ニーナが口々に言う。

「お前らだけでもイけるだろう？」

「んん、ギリギリになっちゃいますけどね」

カークは苦笑した。

「そうか？」

「お兄さんの指示があると、一匹相手でも結構楽でしたよ」

「いつもなら、もう少し手こずっちゃうよね」

テレス、ニーナの言葉を聞いて、俺はアドバイスしてやる。

「その辺はカークが経験積めば、かな」

「そうですね、はは……」

実際カーク達四人は、以前より大分強くなっていた。あの時はゴ布林から逃げてたもんなあ。

それから夕方まで、ゴ布林、ホーンラビット、スモールボアを狩っていく。

ん、数多くね？　と思っていると、ニーナが言った。

「カーク、魔物の数……多くない？」

「……多いと思う」

「だよね」

やっぱり多いらしい。

「強い魔物でもいるんですかね」

「ギルドに報告した方がよいね」

強い魔物？　俺が『マップEX』の感知範囲を広げると、大きいのがいた。

『鑑定』すると、レベル31のワイバーンだった。

竜種の中では弱い方だが飛行能力がある。爪での薙ぎ払い、噛み付き、プレスで攻撃する。

肉はかなりうまいそうだ。

よし……こっそり狩ろう！

俺は密に村の周りに『結界』を張り、魔物が避けていく効果も付与した。

そのおかげで魔物は寄ってこなくなり、パーティーは夕食まで解散になった。

俺はその間に抜け出し、村はずれの人気のないところへ行き、『気配遮断』と『転移』を使い、ワイバーンの近くに跳んだ。

攻撃魔法の『マグナム』を準備する。水弱め、雷強め、音なしに調整。

家系ラーメンの注文みたいだな……と、それより魔物だ。

バリイッツツツ！！

『マグナム』を放つと、ワイバーンは一瞬で絶命し、俺は肉を回収した。

うまい肉ゲットだぜ！

ベルウッド商会で、またバーベキューさせてもらおうか。  
お土産をゲットした俺は、ホクホクと村に戻った。

村では、今日狩ったストールボアやホーンラビットが調理され、机に並べられていた。  
料理担当の奥様方に、「秘伝のタレです」と言って、小分けにした焼肉のタレ一瓶を渡したら、凄く喜びようだった。うまいは正義だな。

カーク達は、村長と一緒に食事をしていた。

カークが村長と話し、ルークとテレスはそれを聞き、ニーナだけが肉にがつついて  
いる。

俺も食べるか……ワイバーンの件は秘密にして、俺は肉に手を伸ばした。

翌朝。昨晩は遅くまで宴会だったので、野郎連中は二日酔いだった。

俺はスキルがあるから平気だったけどな。

午前中に『結界』を解除し、周辺の警戒にあたるが魔物の気配はなかった。

村長に報告し、依頼達成となり、ベルセに戻る準備をする。

帰り際、奥様方に借りました、あんたら焼肉のタレが欲しいだけでしょ、絶対。

俺はワイバーンの肉をゲットしたので、ホクホクでベルセへの帰路に就く。

少し歩いたところで、カークの知り合いらしい人が現れた。

「あ、支部長！」

カークに挨拶した支部長は、俺に目を向けた。

「おつ。お前は初めて見る顔だな。俺は冒険者ギルド、ベルセ支部長のステルクだ」

豪快な感じの人だな。

「トイチです。初めまして、ステルク支部長」

「おう、よろしくな！……トイチ？ んんん？」

ステルク支部長が首を傾げて考え込んだ。というより、何か思い出そうとしている  
のか。

あつ、もしかして、皇都の冒険者ギルドのマスター、マサシから何か通達でもあつ  
たか？

やべえ、面倒くせえつ。

「支部長自らなんて、何かあったんですか？」

「ん？ おおつ、ワイバーンが出たって報告があつてな。討伐隊組んできたところだ」

カークが話しかけた事で、俺の事はとりあえず有耶無耶になったみたいだ。

ナイスツ！ カーク。俺は心の中でサムズアップした。

しかしワイバーンか……俺が倒しちゃったけど、どうしよう。

「街にいたCランク以上を、片っ端から集めたがこれしかないなかつた」

「Cランクが六人……ですか。厳しいですね」

俺は黙って、カークとステルク支部長の話聞く。うん、このままやり過ぎそう。「普通ならな。ま、俺が出てきたから大丈夫だろう」

「そうですね、支部長がいれば……」

難しい顔で言うカーク。

「ふむ……お前、少しヤレそうだな。どうだ？」

油断していたら、いきなりこっちに振られた。

「……えっ？」

ヤだよ面倒くさい。そもそも、ワイバーンはもういないんだ。

「すみません。Eランクの俺じゃ足を引つ張るだけなので、お断りします」

本当は皇都でDランクに上がってるけどな。

「そうか、そいつあ残念だ」

ガツハツハと笑うステルク支部長。あまり残念そうじゃないな、おい。

「まあいい、んじゃそろそろ行くわ。帰日も気を付けろよ」

こうしてステルク支部長は、Cランク冒険者六人を連れて、ワイバーン討伐に向かった。

うん、なんかゴメン……。

翌日、「ワイバーンは飛び去ったらしく見つからなかった」という話を、カークから聞いた。

ステルク支部長から俺の話は出なかったみたいで、一安心というところか。

そこから数日は、カーク達と戦闘訓練をしたり、討伐依頼を一緒にこなしたりした。

俺の場合、剣道の下地しかなかったため、訓練とはいえ非常に勉強になった。

今までの俺の戦闘は、勢いだけだったからなあ。

一つ一つの動作を確認して、地味に実力は上がったと思う。おざなりだった防衛技術も大分良くなった。

数日後、ようやくベルウッド商会から連絡が入った。

カーク達との臨時パーティーもここで解散だ。ニーナには大分ごねられたが、後二〜三日はベルセにいるよと伝え、別れた。

俺はベルウッド商会に向き、応接室に通され、リサさんの祖父を待つ。さあ、ご対面だ。

バァァァアンツッ！！

突然、ドアが激しく開かれた。

そこには、右手を腰の左前に、広げた左手を顔の前に掲げた、黒髪の男が立っていた。

……ジョジ〇立ちで出てきやがった！  
しかし、目の前で見るとアレだな……声も出せねえ。  
応接室に沈黙が流れる……。

ん？ なんかこの人、ちよつとプルプルしてない？ でもポーズは崩さないんだな。  
そう思っていると、廊下から怒声<sup>どせい</sup>がした。

「もうっ!! なにやってるのっ、お父さんっ!!」

「リサっ? これは違うんだっ! 親父がやれって言うからっ!」

男は顔を赤くして、ワタワタと言いつい訳を始めた。どうやら、やらされていたらしい。

「ぶはははははっ!!」

すると、別の野太い笑い声が響いた。

「親父いっ!」

「お祖父ちゃんっ?」

どうやら、ようやくリサさんの祖父の登場らしい。いやに若いけど。

……あれ、どこかで見た事あるぞ。もしかして……おいおい、どうなってるんだ……?

「え〜と、……総司……先輩?」

「まさか……刀一か?」

お互い指を指し合う、俺とリサさんの祖父。どうやら間違いないみたいだけど……。

「マジで……?」



「いやあ、マサシ以外で、日本の知り合いが来るとは思わなかった」

ゲラゲラ笑うソウシ先輩。

「つつ〜か、何で若いんです? 孫<sup>まご</sup>までいるのに……」

「ああ、何かこつち来た時に、神の加護<sup>かご</sup>とかで若返<sup>わかへ</sup>って老けなくなつた(笑)」

「(笑) じゃないですよ……まったく……」

「お前も若いじゃねえか?」

「俺も、神の加護と似たようなもんですね……」

「そうか……じゃ、仕方ねえなっ!」

ガッハッハと笑う姿は、昔と変わってねえ。これで孫がいるとか、冗談<sup>じょうだん</sup>としか思えない。

「……あの〜……二人は知り合いだったの?」

リサさんが尋ねてくる。

「先輩」

「後輩」

俺とソウシ先輩が同時に答えた。

「いや、それだけじゃ分かんないから……」

「まあ、そうだな。面倒だからトーチ頼んだ（笑）」

「トーチさん、お願いします……」

リサさんに頼まれ、分かりやすく説明を試みる。

「仕方ない……えーっと、地元の学校の二つ年上で、悪友……って感じかな」

「掻い摘まむとそんな感じだなっ！」

俺は先輩に向き直った。

「……で、先輩はこっち来てどのくらいなんです？ 何歳の時に来たんですか？」

「んー、三十歳くらいの時だったか。んで、そこから六十年は経ってるな……」

「……そうすると、俺の十四〜五年前くらいですかね」

「ん、向こうだとそんなもんなのか？」

「そうですね。ああ、これで先輩と音信不通になった理由が分かったわ」

「はっはっはっ、すまんな。まあ、そんな理由だよ」

マサシもそうだったが、召喚時に時間のズレがありすぎる。

「お前はどうかんだ？」

「ああ、俺は……」

俺は簡単に、ポークレア王国に召喚された際の話をした。

「ああ、あの国な……。先々代の国王もそんな感じだったな」

「その時はどうしたんです？」

「殴った（笑）」

先輩らしい……。先々代も俺が会った豚王みたいな感じなら、殴らない理由がない。

「親父、国王殴つてたのか!？」

「お祖父ちゃん、王様殴っちゃつてたの!？」

慌て出すリサさん親子。

「ああ、戦争すつから手伝えだのなんだの言つてきやがったからな。気に食わねえから、

鼻を折ってやった」

二人が頭を抱えた。

……俺も暴言を吐いて逃げたから、先輩の事は何も言えん。

しばらく話をして、先輩の家に場所を移し、昼食をいただいた。

午後も、先輩が六十年間何してきたか、俺の一ヶ月間の出来事、先輩がいなくなつて

から日本であった事など、話は尽きなかった。

「そう言えばお祖父ちゃん。元の世界の人と会った事ないって言ってた事なかった？ さつきの話だと、冒険者ギルドのマスターは同郷じゃないの？」

リサさんが先輩に聞く。

先輩は引きつった表情になった。

「ソナナコトイッタツケ？」

「……やっぱり嘘だったのね」

リサさんがゆらあと立ち上がり、目を細めて、笑顔で先輩を見ている。ゴゴゴッと音がしそうなほど、威圧感いあつかんが出ているけどな。

「はあ……お祖父ちゃんの事だから、どうせ忘れてたんでしょ？ もういいわ」

ヤレヤレみたいな感じで、座り直すリサさん。

「すまん。そう、忘れてた」

先輩、謝り方が雑まっ！

「そんな事より、トーチ、今日は泊まってけ！ もう少し話そうぜ！」

「先輩、ノリ……変わってないですね……」

「はっはっはっ！」

その後、先輩の部屋（まさかの和室）に行き、布団ふとんを並べて遅くまで話をした。

やっぱりと言うか、異世界より日本の話が多くなった。マサシより俺の方が、年が近い

からな。

翌朝、朝食をいただき、リビングでこれからの予定を話す。

「次は、アライズ連合国に行こうと思ってます」

「えっ？ トーチさん、ルセリア帝国出ちゃうんですか？」

「ああ、世界を回りたいね」

リサさんの問いに答えると、クラウドさんが口を開く。

「トーチ。出る前に焼肉のタレ、置いてって」

……クラウドさんはブレないな。

「おう、じゃあコレ持っただけ」

先輩が小さな箱を取り出した。

「ソレは？」

「双方向通信が可能な魔道具だ。ダンジョンや特殊とくしゆな『結界』の外なら、電話のように通じる」

「貴重きちゆうなんじゃ……」

「確かに貴重だけどな、だからこそ、渡す人間は選んでる」

ニカッと笑う先輩から、俺は箱を受け取った。

「……まったく……。ありがたくいただきますね」  
「おうっ！」

そして、コソツと耳打ちしてくる先輩。

「呼び出したら『転移』で来いよ。それで、タバコとビールを置いていけ。金は払う」

「そんな事だろうと思ったよっ！　ちくしようっ！」

「ガッハッハッ!!」

バンバン肩を叩いてくる。痛えからっ！

「じゃあ、気を付けて行ってこい！」

「トーチさん、ありがとうございました」

笑顔で手を振る先輩と、頭を下げるリサさん。

「それじゃ、またっ！」

俺は先輩達と別れて歩き出す。カーク達への挨拶がまだなので、一先ず宿へ戻った。

宿に戻ったが日中だったので、当然カーク達はいなかった。

仕方ないので、俺はギルドへ向かった。

ギルドに行くと、怖いオーラを纏ったティリアさんが、仁王立ちで出迎えてくれた。

「……トーチさん、何か言う事がありますか？」

「エーット……タダイマ？」

「何故戻ったらすぐ、ギルドに来ないんですか？」

「……？　そんな規約ないでしょ？」

「それでも、です」

「……？」

「……コホン。で、今日のご用件は？」

「ああ。街を出るので、挨拶をと思わせて」

「……えっ？　ベルセを出ちゃうんですか？」

「そうです、今回はアライズ連合国に向かう予定です」

「……ソナナ」

「まあ、そういう事なんです。次、ベルセに来ることがあったら挨拶に来ますね。お世話になりました」

「アッ、ハイ……」

俺はギルド内のロビーを見渡すが、他に知り合いもないので、ギルドを後にした。

その足で図書館に行って、旅の経路を確認する。

皇都を経由して西へ行き、ルセリア帝国最大の商業都市を抜け、国境を越えたらアライズ連合国か……。

徒歩で二十日前後ってところかな。足りるとは思うけど、もう少し食料買っておくか。各商店を回り、食料を追加し終わったところで、近くの店で昼食を取る。まだ早い時間だけど、宿に戻ってカーク達を待つか……。

ゴロゴロしたり外に出て一服したりして時間を潰しているうちに、夕方になった。そろそろかな、とロビーに降りると、カーク達がちょうど戻ってきた。

「お帰り」

「「「ただいまですっ！」」」

一緒に夕食をいただき、食べ終わって一息ついたところで話を切り出した。

「明日、ベルセを出る事にしたよ」

「……そうですか。寂しいですね」

カークが肩を落とした。

「まあ、そのうちまた会えるさ。こっちに知り合いもいるしな」

「カーク達はずつとベルセにいるのか？」

「そうですね……しばらくはベルセの周りでやっているとします」

「そっか……まあ土産は期待しないで待っていてくれ。戻ってきた時はちゃんと探すから」

「「「はいっ！！」」」

談笑しているうちに、夜は更けていく。

「明日は見送りとかわらないから、ここでお別れだ。四人とも、頑張れよ！ ほら、右手の拳を握って、前に出いな」

俺は四人と、順番に拳を合わせていく。

「おやすみ。じゃあ、またな」

「「「おやすみなさいっ！！ またどこかでっ！！」」」

こうしてカーク達と別れを済ませ、俺は宿を出て、歓楽街へ向かった。

翌朝。賢者モードの俺は、ダルい体を押し起きて起き上がる。

「うう~~~~……ダリイ」

しかし無理してでも、今日ベルセを出発しなければっ！

昨日、明日出る事にしたよ（キリッ）とか、しなければ良かった……。

朝食を食べたら宿をチェックアウト。

皇都側の門に向かい、いつもの門番さんに挨拶して、ベルセを出た。

賢者モード中なので、ゆっくり歩く。

ちよくちよく休憩を挟んだのだが、気が付いたら夜で、魔物の死骸に囲まれていた。



「……アレッ？」

よく分からんが魔物が全滅ぜんめつしている……見てみると、どうやら俺が広範囲雷属性魔法でやっつけたっぽい。賢者モード恐るべし。

とりあえず、ドロップアイテムを回収回収。

街道かいどうから少し離れて『結界』を展開。

野営開始。野営地ではないので、今日は一人だ。

六日後の夕方、俺は皇都に到着した。ギルドマスターの 마사シ に見つかって面倒を押し付けられないよう、感知系無効の『結界』を展開。これで安心だ。

宿でチェックインして夕食を取り、さっさと休む。

翌日は図書館に行き、アライズ連合国への道を確認。

昼食を取り通りを散策さんさく。早めの夕食後、歓楽街へ。

さらに翌日は賢者モード突入、一日休む。

四日目、いよいよ皇都を出発する事にした。

皇都から西——ベルセから見たら北西に向かう。

途中の野営地では、商人や冒険者達とバーベキューして酒盛りさかもだ。

商人には焼肉のタレの小瓶を一つ売った。よっぽど気に入ったのか、高値たかねで買ってくれ

た。異世界で大活躍だな。

道中、ゴールデンホーンラビットなるレア種が出てきた。

素材も魔石も高く売れ、肉も絶品と『鑑定』先生が教えてくれた。ただし、動きがメチャ速いらしい。

「……見える。私にも見えるぞっ！」

俺は雷属性強めの『マグナム』で狙い撃った。

ゴールデンホーンラビットに近付くと、痺れているだけだったので、とどめを刺し、回収・解体した。肉が楽しみだ。

狩りと野営を繰り返す事数日、俺は商業都市ガラニカに到着した。

「……おおっ……皇都に負けず劣らずって感じか。さすが帝国最大の商業都市」  
入場審査のために、長い行列に並ぶ。

門は貴族用、商人用、一般用と分かれ、列も区別されていた。

貴族用の出入口はがらがら。商人用の出入口は一人頭の時間が長いみたいだ。

一般用は列こそ長いものの、サクサク進んでいる。俺の番まで二十分は掛かったけど……。

入場審査も手続きもすんなり終わり、都市内部に入った。

「おおっ！ 賑わってんなあー！」

凄い人の数だ。新宿駅ほどではないが、横浜駅くらいは人がいそう。

俺は門の近くにあった案内板に目を通し、各ギルドと宿屋の場所を確認した。

まずは冒険者ギルド、ガラニカ支部に入る。

受付に行き、買取カウンターへ。素材と魔石を売り、ホクホクで今度は商人ギルドへ。

商人ギルドでは、ゴールデンホーンラビットの素材を売る。

解体も綺麗で状態が良かったのに加え、市場に滅多に出ないとの事で、大分高く買ってくれた。

肉はないのか？ と聞かれたが、俺が食べるから売らない。

冒険者はだいたい冒険者ギルドで素材を売ってしまうが、物によっては、商人ギルドの方が高く買ってくれる。

冒険者はわざわざ商人ギルドに行くのを面倒くさがるのだ。俺も面倒だと思っけど、お金は大事。

「金のために魔物と戦ってるんだから、高く売れる方が良いよな」  
商人ギルドを出て、宿に向かい歩く。

すると、ガラの悪い五人組に道を塞がれた。

「よう兄ちゃん、景気良さそうだなあ。俺達に分けてくれ——」

「断るっ！」

「ああっ？ なんだとっコラあっ!! 痛い目見てえのかっ、ああんっ？」  
後をつけているのは、『マップEX』で知っていた。

……赤いモヒカンが一人に、スキンヘッドが四人。何で五人とも、トゲ付きの肩当てしてんだよ？ 赤モヒは隊長機のもりなの？

「いかんっ！ 超笑いそう。俺が我慢してブルブルしていると、男達が口々に言った。

「おいおい、下向いてブルッちまっつてんじやん」

「あんま威圧すんなよ、リーダー」

「ああっ？ 威圧なんかしてねえよっ！」

リーダーと呼ばれた赤モヒが怒鳴る。

「やっぱりお前が隊長機かっ！ 俺は堪えきれず噴き出したっ！」

「プハハハハハッ!! ヒーツ……ブフッ！ クククク……」

「ヤバいっ！ 面白過ぎて呼吸が（笑）。

「……はあ……はあっ……はあ……」

俺が顔を上げて、涙目で五人組を見ると、凄く睨まれていた。

「何笑ってんだ！ 舐めてんのかっコラ、ああっ!!」

「ふう……いや、すまん」

ようやく落ち着いた。

なんか怒ってんな。早くチェックインしたいんだが……。

そんな俺の考えが顔に出たのか、キレた五人組が殴りかかってきた。

まずは雷属性魔法で、五人組の動きを止める。

次の瞬間、赤モヒ以外の四人を蹴り飛ばす。

四人は頭から建物の壁に突き刺さり、愉快なオブジェになった。

赤モヒは驚き、俺を睨み付けてくる。

ほう……さすがリーダー。まだやる気か。三倍速いのか？ 若さ故の過ちか？

赤モヒが膝を曲げて腰を落とし、前傾姿勢になった。レスリングに近い構えだ。

そして、流れるように……

「すみませんでしたあーっ！」

……土下座した。

「アニキ！ 宿はこっちですっ！」

「……」

「アニキ！ あそこの屋台の串焼きはなかなかうまいですよ！」

一気に腰が低くなった赤モヒに、俺は冷たく言い放つ。

「アニキって言うな」

「……じゃあ親分、先輩、なんて呼べば良いんですか？」

「そもそも舎弟にした覚えはないっ！ 付いてくんなんっ！」

「アニキ！ あっちの屋台もなかなか良い味出してるんですよ！」

「話聞いているっ!？」

俺は宿とは反対方向に歩く。しかし、赤モヒは付いてくる。

宿から十分離れたところで『気配遮断』発動。『縮地』で距離を稼ぎ、『転移』で宿の近くへ。

これで見失ったろう。俺の逃走コンボは最強かもしれない。

俺はチェックインして部屋へ行く。

おかしい、商人ギルドを出た時はニコニコだったはずなのに疲れた……。

部屋で昼寝をして起きると、夕方を過ぎていた。

……寝過ぎたと思っていると、腹が鳴った。昼飯抜いちゃったからなあ。

一階に降りると、食堂の入口に近いテーブルに、例の五人組が座っていた。

「あ、アニキ！ この宿だったんスね！」

他の四人はビビッているが、赤モヒだけは遠慮なく話かけてくる。

俺は無視してカウンター席に座り、食事を注文した。

「アニキ、あっちのテーブルで一緒に食いましょうよ」

「嫌だよ。俺は一人で食べる」

赤いモヒカンが悲しそうな顔をしたって、可愛くもなんともないんだよっ！

「ほら、早く戻れっ」と、俺は大きく手を振った。

赤モヒが、「明日は一緒にしましょうね」とテーブルに戻っていく。……やだよ。

俺は素早く食べ終わると、気配を消し、『縮地』で食堂を出た。

部屋へ戻り、『転移』で城壁の上へ跳び、一服する。

「すう……ふう……」

紫煙を吐き、夜風に当たる。

今日はまだまだ時間があるし、昼寝したから眠気もない。なら行くかっ！

火を消して携帯灰皿へ。『転移』で部屋に戻り、『マップEX』を確認。

五人組はどうやら部屋に戻っているようだ。ならロビー通っても平気だな。

俺は宿を出て、歓楽街を探して歩く。

くそう、昼間のうちに探しておくつもりだったのに……赤モヒめっ、今度会ったらドラゴンスクリーナ！

酒場の多そうな通りを見つけたので、裏通りへ行くと、目的地を見つけた！

俺はその路地に吸い込まれていった……。

翌日は賢者モードのため、朝食を抜いて惰眠を貪った。午前中いっぱいダラダラゴロゴロして回復に努める。

赤モヒ達は冒険者なのか知らんが、街の外に出ているみたいだ。

昼から外に出て、飯屋を探す。

さすが商業都市。店の数も多く、料理も多種多様だった。迷うな。

テクテク歩いていると、和の雰囲気を出す店を発見。客の入りは良い。

異世界で和って少し怖いけど、転移者の店かもしれない。入ってみるか。

店の中は日本っぽさが強調されていた。

お座敷に通され、畳に座る。テーブルではなくちゃぶ台だ。

厨房からは、ジュージューと、良い音と良い匂いが漂ってくる。これはアレだよな……

まさか異世界産の豚カツが食えるとは。

店員さんが湯呑みに水を入れて持ってくる。

お茶は栽培できてないのか？　と思いつながら、サービスランチを頼んだ。

「サービス一枚つ！」と、厨房に向かい声を出す店員さん。

少し待つと、定食が運ばれてきた。

豚カツと山盛りのキャベツ、ライスとコンソメスープ、胡麻の入った小鉢とお新香のセツト。

うん、良い感じだ。

カツを一口……うまい。ただ、ソースが少し残念だった。

俺はタブレットで、日本産の中濃ソースと和辛子を購入。

トンカツソースも良いが、俺は中濃派だ。

中濃ソースを掛け、和辛子をちよつとつけて一口……うまいっ！　凄え合うっ！

汁物は、味噌がないのかコンソメスープだったが、まあまあ良かった。

トータルで……これはかなりアリ！

俺はライスを一度お代わりし、大満足で店を出た。ごちそうさまでした。

豚カツ屋を出た俺は、一服してから、屋台や店を見て回った。

食材や調理器具、服を買っていく。

魔道具店に入り、何かあるかなあ〜と、棚を見ていく。

「……なん……だっ？」

以前、皇都のカフェで見た、エフェクター内蔵のギターが売っていた……。

ぐう……旅にまったく必要ない、むしろ邪魔にしかならないが……欲しいっ！　しかも

レスポールタイプとか……若干シャレてる？

値段を見ると結構お高い。結局、必要ないなど諦めた。  
 値段を取り直して他の品物を見ていく。

魔導コンロ…火の魔石に魔力を溜めて使用。強弱の調整可能。

魔導送風機…風の魔石に魔力を溜めて使用。

魔導食洗機…水の魔石と動力用の魔石を使用。

魔導コンロが気になった。料理に火の強弱は必要だからな。他はスキルでどうにでもなる。

結局、店内では、ギターとコンロ以外に目を引く物は見当たらなかった。

ちよつと高いけど、コンロを購入。これで料理の幅が広がるな。

ガラニカには図書館がないな、と思っていたら、資料館があった。

古い絵などが展示されていて、思った以上に面白かった。

資料館を出ると、いい時間だったので宿に戻る。

ぬ……ロビーに赤モヒがいるな。俺は踵を返し、宿から離れた酒場を探し、移動する。

いい感じの酒場を見つけ、カウンターで一人飲み。

おつ、この店ラガーがうまい。二杯三杯と飲み進める。つまみもうまかった。

夜も更けたので、支払いをして宿に戻る。さすがに赤モヒ達も部屋に戻っているようだ。

部屋に戻り、『転移』して外で一服。さて寝るか……。

翌朝、ガラニカを出る準備をする。装備を整え、最後に腰に刀を挿す……よし。

宿をチェックアウトして、皇都と反対側の門へ向かう。商人、貴族以外はノーチェックなので、すんなり通過した。

「……さて、行くかっ！」

ガラニカを出て、国境まで続く街道を歩く。たまに出てくる魔物は『マグナム』で倒す。

夜は野営地で、商人や冒険者を交えてのバーベキューだ。

焼肉のタレはここでも大人気。一番活躍してるんじゃないか？

もう一つ、ガラニカで仕入れた麺で、焼きそばを作った。鉄板も用意しておいたしな。

この焼きそばも人気だった。理由はタブレットで購入した、日本産のウスターソースだろう。香ばしい匂いが堪らない。

大満足のバーベキューだったが、警戒当番まで食い過ぎで動けなくなっているのはダメだろう？

## 立ち読みサンプル はここまで